

## 『ロシア語学とロシア語教育の諸相』

堤 正典編（国際文化交流学科）



2018年 ひつじ書房

神奈川大学言語研究センターで長年ロシア語学およびロシア語教育をテーマに共同研究を行ってきた。センターでの共同研究を中心に、同じメンバーによる他のプロジェクトのものの一部を含め、またメンバーの「緩やかな共同研究」のものでも

も加えて、まとめた論集である。書き下ろしの論文の他に、既出の論文も含まれ、後者は若干の訂正をほどこしたのから、ある程度の改稿を含むものまでである。著者は編者の堤を含めて5名であり、神奈川大学横浜キャンパスでロシア語を教える者とそこでロシア語を勉強してロシア語の研究を行った者である。

本書は五つの部からなる。第1部「ロシア語文法と意味一体（アスペクト）の問題」はロシア語文法の問題としてアスペクト（体（たい））について論じた2編から成る。1編は述語 мочь のモダリティの意味と動詞不定形の態のカテゴリーの機能について論じ、特定の統語構造においては実現するモダリティに制限があることを明らかにした。もう1編は、様々な言語のアスペクト研究において汎用される「Vendlerの分類」をロシア語動詞について考察しており、他の研究者が論じた分類の適応とは異なる見解を示している。

第2部「ロシア語教育の諸問題—ロシア語学からの視座」はロシア語教育におけるいくつかの問題についてのロシア語学からの考察である。ロシア語の不完了体動詞である接頭辞のない「運動の

動詞（移動動詞）」の用法を不完了体動詞の用法と照らした考察、ロシア語の（日本語での）文法形式の名称についての考察、ロシア語の文字の学習についての文字論の観点からの考察、ロシア語学習書における体の意味の説明と提示についての考察、ロシア語学習における「レアリア」の知識のための意味記述についての考察の5編が含まれる。

第3部「ロシア語学習語彙について—語形変化学習との相関」は、ロシア語教育の中でも特に学習語彙の問題を取り上げている。ロシア語の初等学習者に教えるべき語彙と文法の兼ね合いについて論じた2編と、それらをふまえて学習語彙をさらに広げて分析した1編からなる。後者の1編は中上級者の学習語彙を対象とし、用いた資料を改めており、より一般性の高いものとなっている。

第4部「レフ・シチェルバの外国語学習論—ロシア・ソヴィエト言語学の潮流から」はロシア・ソヴィエト言語学におけるペテルブルク学派の重鎮レフ・シチェルバ（Л. В. Щерба 1880-1944）の2つの外国語学習についての論文の翻訳とその解題である。ロシア・ソヴィエト言語学が紹介されることは少ない日本の現状も鑑みて収録した。

第5部「ロシア少数民族言語の研究から—ロシア語とマリ語」はロシア語教育とともにロシアの少数民族の言語の研究を行う中から生まれたる論考である。ここでは印欧語族であるロシア語とは系統的に異なるウラル語族の言語であるマリ語（ロシア連邦マリ・エル共和国）が取り上げられている。そのような少数民族の言語の研究において、あるいは少数民族において、国の最も有力な言語であるロシア語がどのような存在であることを明らかにするものとなっている。

大方のご批判を頂ければ誠に幸いである。